

## 山田俊治著『大衆新聞がつくる明治の「日本」』

土屋 礼子

本の題名をつけるのは難しい。長からず短すぎず、書かれた内容と意を的確に言い尽くして背におさまリ、読者を引きつける強く魅力的な呼びかけ——その点で、本の題名は俳句に似ている。さて、この山田氏の書『大衆新聞がつくる明治の「日本」』という惹句は、私たちに何を呼びかけているのだろうか。

まず序章では、「大衆新聞『読売新聞』の出現」が語られる。

一八七四年十一月二日に創刊した『読売新聞』は、「記事の文章を、それまでの新聞が採用していた文語体ではなく、口語的な談話体で書き、さらに傍訓を付す」という特徴を持ち、その内容は、「女童のおしへ」という教化性が強調されていた。この「俗談平話（ふだんのはなし）」で語りかける民衆を読者対象に想定した新聞の出現に筆者は、「大衆新聞の成立」を見る。しかし、正確に言うならば、民衆は大衆と同じではない。仏教用語の意味を離れて「大衆」という語が、労働者階層や大量の集団（Mass）を指すようになったのは大正期であり、それはある社会現象を背景としている。だから、「西南戦争以前の初期『読売新聞』を主要な分析対象として、文明開化期の社会変容と新聞メディアの関わりを、できるだけ具体的な記事によりながら考えてみる」とい

うのが筆者の意図ならば、その「社会変容」における「大衆」および「大衆新聞」と呼ぶものは何なのか、筆者はもっと明確にすべきである。なぜなら、民衆と大衆を同義に用いるぞんざいさというだけではすまない問題がそこには含まれているからである。

小新聞の読者は、確かに大新聞の読者を数で上回るようになるが、社会全体の中ではまだ圧倒的に少数集団であつたから、その量的な「大衆」性の側面は、大新聞との比較による相対的なものでしかない。また、漢文を読みこなせるような知識人ではない、教養の低い庶民という質的側面での「大衆」性も、またエリート知識人から見た評価であり、当時多くいた文字の読めない人々からは、小新聞読者は十分に知識人だつたはずである。したがって、小新聞を「大衆新聞」と呼び、小新聞読者を「大衆」と見るとき、それはすでに「大衆」を教化し啓蒙すべきだと考えるエリート知識人の上からの視線を含有している。そこに現れるのは、「民衆新聞」の言い換えではあり得ない「大衆新聞」の姿、すなわち勧善懲悪というイデオロギーで文明開化を宣伝するプロパガンダ機関としての「大衆新聞」である。それゆえ、筆者が指摘しているように、小新聞による「啓蒙」という行為が政治的行爲」であり、小新聞の政治性は重要な分析対象なのである。

しかし、この点に筆者が十分自覚的であるのか、疑問に感じられる箇所も多い。たとえば、最初から大新聞と小新聞における内容的な区別が截然と分化していたわけではないという説明は確かにその通りだが、「読者層にも明確な区別があつたとも思われな

いたふしがある。」と論じた箇所で、「それは、『本所撞木ばし際  
の木下良三の娘おはるハ十六に成り、本が好きにて、新聞も朝野  
と読売ハ毎日よみ、親へハ孝行をいたし、実におとなしい生れつ  
き』(一八七五年五月一七日)」というような少女が報じられていたこ  
とからもわかるであろう。」(本書三五頁)と例証しているのはい  
ただけない。少女が新聞を読むという当時としてはかなり珍しい  
例により、大小新聞の読者層にも明確な区別がなかったという結  
論まで導き出すのは、論証に飛躍があつて不適當であるばかりで  
なく、この記事はおそらく、実際の事実がどうあれ、こうした例  
を手本として掲げ、新聞を読む行為を文明の一環として振興する  
意図をもつて書かれたものだという点を看過しているように思わ  
れるからである。

筆者が第二章「明治という国家の支配の網目」および第三章  
「識字社会の様態」で論じているように、明治新政府は文明国家  
を作り上げるために、文字を通じた支配体制、それも新聞雑誌に  
代表される活版印刷物による情報伝達網を全国に張り巡らせ、庶  
民にも浸透させることを目指した。文字の読めない者には、読み  
聞かせや解き明かしの手段が講じられたが、同時に無筆を恥と  
し、識字を基本とする社会を構築しようとした。新聞は、学校と  
ともにその先導役であつた。文字を学び、新聞を読むことは産業  
社会に必要な知識を得、立身出世する手段として、ことさら新聞  
紙面で推奨されたのである。

とすれば、そのようなバイアスを前提にこの時期の小新聞の記  
事は読まれなければならない。たとえ現代の日本で「新聞は客観

報道を旨とするメディアである」と教えられていようとも、それ  
はいわば理念として掲げられているのであり、実際に全く客観・  
公正・中立な記事が成立しているわけではない。明治初期から太  
平洋戦争を経てこのかたの新聞の歴史を見るならば、程度の差は  
あれ、何らかの時代背景によるバイアスのない記事はない。新聞  
が事実を鏡のように映すというのは、一種の虚構である。

第四章「(事実)の時代」はその問題を扱っている。嘘や誤り  
のない正確な事実を誰が保証するのかといえば、明治初期にはそ  
れはまず政府による公式発表であつた。従軍記者のように現場に  
踏み込んで見聞きする記者も存在せず、裏を取るという手法も確  
立していなかった当時の取材体制では、噂や聞き込みは重要な情  
報源であつたが、そのまま信頼して掲載するには不安がつきま  
とつた。そこで記者たちは、風説は風説として伝え、それに虚実  
の判断を加えるという提出方法をとつた。一方で、「実説とハ  
おもはれません」と噂を否定し、他方では「虚説かハ分かります  
ん」と逃げを打ち、「虚実を判断する、事実の正しい基準を提供  
する」新聞の枠組みを創り出したと筆者は論ずる。

しかし、この枠組みは同時に、虚構と事実を峻別して示すばか  
りでなく、逆に物語として事件記事が消費される可能性をも開い  
た。教化性を表向きの額縁として、中身は戯作小説のように楽し  
んで読める小新聞の雑報記事がそこに成立する。第五章「物語と  
しての新聞」および第六章「読者の欲望の行方」は、その雑報記  
事をしていねいに読み解き、読者がそれらをどう読み楽しんだかを  
明らかにして、本書の中で最もおもしろく、小新聞の物語世界の

内実に迫っている。

筆者が指摘するように、事件を理解するために、一定の解釈に従った因果関係を構成した物語を読者は求め、当時の雑報記事はそれに応えた。いかに正確であっても、脈絡のない事実の列挙だけでは、新聞は読者を引きつけられなかった。そこで、事件の解釈を織り込んだ説明が必要とされた。読者は「文字を消費する娯楽」として新聞を読む欲望を満たすため、時事的事件を解釈したおもしろい話を求めた。特に勧善懲悪の物語は、庶民を教化する枠組みとしても、新聞には都合がよかった。いわば、上からの一方的な文明開化のプロパガンダに満足しなかった読者が求めたのが、「物語としての新聞」なのである。

第七章「懲戒する新聞」および第八章「スキャンダラスな眼差し」は、こうした新聞が実際の社会生活にどのような影響を与えたかを論じている。勧善懲悪的な物語としての雑報記事は、恥を意識させ、差別的な視線を助長し、悪を抑止するとともに、当事者を懲戒し、その悪名を流布させ、時には社会から排除されるまでに追い込んだ。記事によって内面化された規範は、人々が互いに監視しあう世間を広げ、そのなかで特に華士族のスキャンダルが喜ばれた。醜聞によって新聞は庶民における権力となった。

終章「表象のなかの近代社会」で筆者は、以上のような「最初のマス・メディアである大衆新聞によって、文明開化期に組み替えられた身体感覚に由来する」擬似的な現実世界に自足する「メディア人間」が誕生したという。「風俗の改良にとどまらない、世界観にわたる変革を民衆にまで浸透させようとした」文明開化

は、「マス・メディアによってもたらされた、表象世界の変容として現象し」、「それ以来、民衆レベルにいたるまで、メディアが提供する表象世界を生きるような時代がはじまった」と筆者は説く。この「メディア人間」とは、文字を読み書きすることで国家に所属し、国民という意識を持つ存在でもある。国民として統合される人々に対して、表象が流通する社会を広げることが、文明開化期の『読売新聞』の役割であったと筆者は結論づけている。それが「大衆新聞がつくる明治の『日本』」という表題の意味だろうか。

しかし、結末を読み終えた後も疑問はいくつも残る。ここで「日本」となっている括弧付きの意味は何だろうか。「民衆レベル」「大衆的なレベル」とは何だろうか。これは結局、国民国家論の中に小新聞を位置づける議論なのだろうか。続き物と近代文学との関係を筆者はどうみているのか。ともあれ、文学テキストを読むように新聞記事を精読する作業に基づき、文明開化を時事的表象世界の成立期として捉え直そうとした意欲作である。

(二〇二一年一月 日本放送出版協会 四六判 二七〇頁 一〇二〇年)